

と舌うちしながら、

「御用。御用。」

と近寄っていったら、なんと盗人はどこにも見当たらず、ただ見えるものは、高さが五尺、幅が二尺ばかりの石がたつてあったのだ。

役人は、あぜんとして、

「ああ、これは、だめだ。」

とぶつぶつ言いながら、いずこともなく、立ち去って行ってしまったのだ。

それからというものは、この村堺に立っている石を誰言うとはなしに、

盗人石と呼ぶようになったのだ。

